

ラプター ピュアマインズ
とある猛禽竜の純心

-バニッシュラプター誕生篇-

著者／流遠亜沙

原作／紙白

ASSAULT-SYSTEM 文庫

■ バニッシュラプター スナイパー装備 機体解説

ガイロス帝国が部隊長クラスのための量産試作機として開発した機体。ヘリック共和国のRZ-030 ガンスナイパーを参考に更なる高性能、高汎用性を目指して設計されている。

ガンスナイパーやレブラプターなどに使用されているヴェロキラプトル型野生体ゾイドよりも大型のユタラプトル型野生体ゾイドを素体として使用しているため中型ゾイドの中では小型の方だが、

並みの中型ゾイドを凌駕するコア出力を持っている。尚完全野生体コアを採用しており、高い操縦性を誇る。

特徴としてはヘルキャットクラスの隠密性と高い格闘性能を持った素体に各種オプション装備を追加する事で多様な戦場に対応できるようになっている。参考になったガンスナイパーと同様に戦闘中にオプション装備の強制排除も可能。非常に武装の幅が広くハードポイントに接続さえ出来ればガイロス、ヘリック、ネオゼネバスなどあらゆる規格の武装をコンバットシステムの微調整のみで使用する事が可能となっている。

本装備は隠密性能を更に向上させるステルスユニットと超長距離狙撃を可能とする大型狙撃銃を装備した形態。



型式番号：	XXXZ02 (後に登録抹消)
用途：	攻撃、対機甲、対ゾイド
全高：	15.1m (武装含む) 12.1m (本体のみ)
全長：	21.9m
重量：	68.0 t
最高速度：	310km/h (フル装備時)
固定武装：	光学迷彩装置、AZ ジャミングミサイル×肩部装甲内、レーザーファンク(牙)、ストライクレーザークローⅡ(足爪)、テールブレード(尻尾先端)
オプション武装：	ステルスウイングユニット×後ろ足側面各1、AZ-75mm 大型電磁狙撃銃サンダーボルト×1、AZ-40mm 拳銃ハンティングホーク×腕部各1
推進装備：	サプレッサースラスタ-脚部×各2基、尻尾×2基

誰もが思うようには生きられない。

望まぬ力を与えられ、望まぬ生き方を強いられる者もいる。

それを不条理だと嘆いても仕方ない。

それを否定しても何も変わらない。

この世界は——理不尽だから。

だから、それは心を閉ざした。

辛い現実を受け入れたくないから。

しかし、それは根本的な解決にはつながらない。

そして、周囲も長くはそれを許してはくれない。

役に立たないものは棄てられる。

だからといって、どうすればいいかも判らない。

何も出来ない。

どうしていいか判らない。

だけど、何もしないまま消えたくはない。

生物は何かを成すために生まれてくるのだから。

これは——そんな ピュア・マインズ 純心な ラプター 〈猛禽竜〉の物語。

とある猛禽竜の純心

ラプター
ピュアマインズ

・バニッシュラプター誕生篇・

プロローグ

ZAC二一〇五年、秋。

ヘリック共和国はギガノトサウルス型の大型ゾイド〈ゴジュラスギガ〉の開発をもって、ネオゼネバス帝国に対して反撃の狼煙のろしを上げた。

一方でヘリック共和国の同盟国となったガイロス帝国でも、新型ゾイドを生み出そうという動きがあった。

〈バニッシュラプター・プロジェクト〉。

それは〈暗黒大陸戦争〉——いわゆる本土決戦にて多大な被害を被ったガイロス帝国の、希望の星だった。

だがそこには、ネオゼネバス帝国との戦争が終結後、少しでも勝利に貢献し、自国の発言力を確保しておきたいというガイロス帝国上層部の思惑もあった。故に〈バニッシュラプター・プロジェクト〉は極秘裏に行われた。ヘリック共和国の手を借りれば、それはガイロス帝国にとって負い目となる。

だから機体の設計のみ外部から発注したが、開発は完全にガイロス帝国軍ゾイド開発局主導で行われた。

そうして、様々な思惑の結果生まれたのが〈バニッシュラプター〉である。

ラプター ピュア・マインズ
とある猛禽竜の純心 ―バニッシュラプター誕生篇―

ガイロス帝国軍ゾイド開発局・第三研究所。

居住エリアから遠く離れた演習場に一体のゾイドがいた。

ゾイド――それは惑星Z_iに存在する金属生命体の総称である。ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Z_iにおける戦いにおいて最強兵器として君臨していた。

ヒトは争う。

生きる事は戦いだから。

戦うためには力が要る。

惑星Z_iの人間が力として選んだのがゾイドだった。

ヒトはゾイドを求め、ゾイドもそれに応えた。

それがヒトとゾイドの歴史の始まりだった。

そしてここにも、新たなヒトとゾイドの出逢いがあった。

「――なんで思い通りに動かない？」

演習場でぎこちない動きを見せるゾイドのコクピット。そこには一人の女性の姿があった。

彼女の名はファルナ・イカルガ。

年齢は三十三だが、外見だけを言うなら二十代半ばから後半くらいにしか見えない。知的で鋭い瞳は夕陽のような橙色。少し癖のある茶色に近い赤毛を、ポニーテールに結っており、その長さは腰まで届く。

ファルナは東方大陸人と西方大陸人のハーフであり、身長は女性としては長身で百七十センチ近くある。

言ってしまうえば美人だ。だが、おいそれと彼女に声をかける男は、余程の馬鹿か猛者のどちらかだろう。表面的には穏やかだが、下手に触れようとすれば、見えない刃を突き付けられたような殺気を向けられる。

研ぎ澄まされたナイフの如き鋭さを持った女性――それがファルナという人物だった。現在、ファルナは新型ゾイドの量産試作機のテストをしている。

彼女は苛立っていた。それはテスト中のゾイドが、思うように動かないからだ。

ゾイドの名称は〈バニッシュラプター〉。

共和国軍が開発したベロキラプトル型の小型ゾイドである〈ガンスナイパー〉を参考に

して開発された、ユタラプトル型の中型戦闘ゾイドである。

ステルス機能に特化した機体だけあり、視認性の低いロービジ塗装——ダークグレーとコバルトブルーのツートンカラーで塗られている。ラプター・タイプのシルエットはそのままだに、全身に追加の装甲と装備が取り付けられており、エッジの利いた攻撃的なイメージを想起させる。

現在（バニッシュラプター）に取り付けられているのは広範囲レーダー・ユニットと対になるAZ75ミリ大型電磁狙撃銃（サンダー・ボルト）。両腕にはAZ40ミリ拳銃（ハントイング・ホーク）。そして両脚部のステルス・ウイング・ユニットの、主に三つとなっている。

通称・スナイパー装備。

かなりの重装備だが、（バニッシュラプター）の挙動に無理は見られない。少なくとも外部からはそう見える。

だが——

「（バニッシュラプター）、反応が遅いぞ！」

コクピットでファルナが櫛（げき）を飛ばす。

すると（バニッシュラプター）はビクツと脅（おび）えるような反応を見せた。

「何を脅（おび）えてる？ お前の反応速度はそんなものじゃないだろう」

次はシュンとするように（バニッシュラプター）は項（うなだ）垂れた。親に叱（な）られた子供のよう

に。

「……………」

ファルナは嘆息（たんそく）する。（バニッシュラプター）のテストパイロットを務めて二日、彼女には判った事があった。それは（バニッシュラプター）がとんでもなく臆病な性格をしている事だ。

ゾイドとは戦闘機械獣——つまり兵器だ。戦う事を恐れるゾイドなど、飛ぶ事を忘れた鳥、泳ぎ方を忘れた魚も同然だ。とてつもない潜在（ポテンシャル）能力を秘めながら、完全に宝の持ち腐れだった。

「……やめだ。今日はここまで」

興（そ）が削（そ）がれたという風に、赤い癖毛のポニーテールの美女は短く言った。



夕暮れ時。研究所を出たファルナは町外れの酒場（バー）にいた。

カウンター席で軽い食事を摂りながら、ソフトドリンクで喉を潤す。彼女は酒を飲まない。あんなものは毒だと思っている。故にタバコも吸わない。

普段は主に東方大陸で傭兵稼業を営んでいるのだが、今回は友人からの依頼でテストパイロットをやっている。

その友人はテストには参加していない。なので一人で食事を摂っていたのだが、

「——ファルナ」

と自分を呼ぶ声に、彼女は後ろを振り向いた。

そこにはファルナと同じようなポニーテールの娘がいた。

年齢は二十代半ば位だろう。髪の色は黒く、ファルナとは対照的なストレートで、瞳の色も黒い。東方大陸人の特徴を多分に備えており、身長はファルナより少し低い。

整った造りの顔に人懐っこそうな表情を浮かべ、気楽な調子で片手を上げている。

「アヤカ？　なんであんたがここにいるのよ」

「ごあいさつね。あたしがここにいちゃいけないの？」

ファルナの問いに、アヤカと呼ばれた娘は笑顔で答えた。気を悪くした様子はない。明るい性格なのであろう事が容易に想像がつく娘だ。

アヤカ・T・シユバイツァー。

ファルナと同じくゾイド乗りである。ファルナとは顔馴染みで、何度か一緒に仕事をした事もある。もともと、アヤカは傭兵ではなく『なんでも屋』だったが。

「あんたと関わるとロクな事がない。特にこういう場所だとね」

と言い、ファルナはアヤカの背後にいた人物に視線を向けた。

「久しぶりね、クノキ。元気にやってる？」

「ご無沙汰しています、ファルナ・イカルガ」

ファルナにそう答えたのは十七、八歳くらいの美しい少女だ。肌の色は透き通るように白く、艶やかで長い紅い髪と、紅玉のような瞳が特徴的だ。その表情は透明で、感情と
いうものが読み取れない。口調も淡々としており、機械的でそっけない。

静謐な印象の少女。

クノキ。

それがアヤカに連れ添っている少女の名前だ。

ファミリー・ネームはない。

クノキ——ただそう呼ばれている。

「ちよっとー。あたしと対応の仕方が違ってない？」

黒いポニーテールの娘——アヤカが不満そうに言いながらファルナの左隣のカウンター

席に着く。当然のように紅い髪の少女——クノキもその隣に座る。

「あんたに気なんか遣ってたら、気苦労で死ぬるわね」

ファルナが悪びれた素振りも見せず言っただけ。

「久しぶりに会うのにずいぶん言い草ですこと。ま、いいけどね」

と、アヤカも気にした風でもなく手早く注文を済ませる。クノキは「同じものを」とだけ短く言った。

「どう？ 新型ゾイドのテストパイロットは？」

「……どうして、あんたがそんな事知ってるの？」

アヤカの問いにファルナは怪訝な表情を浮かべた。〈バニッシュラプター・プロジェクト〉はガイロス帝国軍の最重要機密事項だ。だが、アヤカは何でもない事のように言った。

「ロゼットに頼まれてね。ファルナをフォローして欲しいって」

「ロゼットが？」

ロゼット——フルネームはロゼット・コダール。〈バニッシュラプター〉の設計者であり、ファルナの幼馴染おきななじみの女性の名だ。そして、ファルナにテストパイロットの件を依頼した人物でもある。

「どういう事？」

思わぬ名前が挙がり、ファルナはアヤカに続きを促した。

「〈バニッシュラプター〉を設計だけさせて、開発チームから外された事に憤慨ふんがいしたらしくてね」

その話はファルナも聞いている。だからせめて〈バニッシュラプター〉の完成を見届けたい——それがファルナがテストパイロットをやる事になった理由だ。

アヤカは続ける。

「それで色々調べてたら、この計画——なんか、やばいらしいって事が判ったの」

「やばい？」

「そ。で、私とその調査を頼まれたの。それで本格的に調べてみたんだけど——」

アヤカは一息つき、

「もう——真っ黒」

と言った。

「そもそも〈バニッシュラプター・プロジェクト〉は国から許認可が下りてないのよ。今のガイロス帝国は、まだ本土決戦の混乱から抜け切れてない。どこかで強権を発動して、計画を強引に進めている人間がいるわ」

「そいつが黒幕って事？」

ファルナの問いにアヤカは頷いた。

「調査は私の方で進めるから、ファルナは何も気付いてない振りをして。〈バニッシュラプター〉は大事な証拠物件でもあるし、切り札になるかもしれない」

「私に道化を演じろと？」

ファルナの視線が鋭くなった。真つ当な神経の持ち主なら委縮していただろう。

だがアヤカは、

「そんな怖い顔しないでよ。でも、怒った顔も素敵よ？」

と、のたまった。

対するファルナは毒気を抜かれたように嘆息した。アヤカに脅しや挑発は通用しないと知っているからだ。『のれんに腕押し』という単語が脳裏に浮かんだ。

するとアヤカは思い付いたように別の話題を振ってきた。

「ねえ、〈バニッシュラプター〉ってどんな子なの？」

「……正直、かなり手を焼いている」

ファルナの返答にアヤカは俄然、興味が湧いた。

「へえ。ファルナが手こずるなんて、よっぽどのジャジャウマだ」

「逆よ。とんでもない臆病者」

いっそ、ジャジャウマならどれだけ楽かと思う。気性の荒いゾイドなら何体も乗りこなしてきた。だが、〈バニッシュラプター〉はまったく違う。

ゾイドと搭乗者の関係は大きく二つに別れる。

一つは『相棒』として対等の関係を築くやり方。もうひとつは完全にゾイドを従える、

『主従』としての関係。

アヤカの場合は前者となり、ファルナは完全に後者だ。

「臆病ねえ。まあ、そういう子もいるんじゃない？」

と、世間話の体で言うアヤカ。

「はあ？ ゾイドなのよ？ 戦うのが怖い戦闘機械獣なんて、話にならないわ」

「いやいや、うちの〈ヤミヒメ〉も結構気難しいのよ？ 放つとくと拗ねるし、なんて言うの——ツンデレ？」

〈ヤミヒメ〉とはアヤカの搭乗するゾイドだ。機種はオオカミ型のコマンドウルフ・タイプ。漆黒のカラーリングを施され、重火力による射撃・砲撃戦を得意としている。

「確かに好戦的ではあるけど、時々、ひどく臆病になるの。そこが可愛いんだけどね」

まるで恋人の惚気話のような口調でアヤカは言う。

「だからさ、そういうゾイドがいても、あたしは驚かないのよね」

ようやく運ばれてきた料理に手をつけながらアヤカは語った。

クノキも黙々と料理を口に運ぶ。自己主張をしないのに、不思議と存在感を感じさせる少女だとファルナは思う。

「あなたは、その子をどうしたいの？」

あつという間に料理を平らげたアヤカがファルナの目をのぞきこむ。アヤカの瞳に自分の姿が映っている。同じように自分の瞳にもアヤカの姿が映っているのだろうと、どうでもいい事を思いながら、ファルナは答える。

「どうもこうもないわ。ゾイドは戦闘兵器よ。戦ってこそ意味がある存在でしょう？」

「それは否定しないわ。戦っている時こそゾイドは輝く――多分、私達もね」

「――」

「けど、戦えて言うだけがヒトとゾイドの関係じゃないでしょ？ まずは、あなたから歩み寄って見たら？ じっくり話でもしてさ」

そういうとアヤカはデザートにチョコレート・パフェを追加した。クノキも「同じものを」と言ったので、アヤカは三つのパフェを注文した。

「なんで三つ頼むのよ」

「ファルナも好きでしょ、甘いもの？」

「……ふん」

注文を取りに来たウェイトレスに「チョコパフェ三つね」とアヤカは告げ、「私のおごりよ」と付け足した。

そこへ――

「よう、ねえちゃん達。景気はどうだい？」

あんまりと言えばあんまりにもベタな展開に、ファルナは頭を抱えなくなった。

ナンパだ。

相手は二十代から三十代の男が三人。その後のテーブル席には仲間であろう別の男達が四人いた。一応人数を合わせる位の常識はあるようだが、酒が入っているらしく、理性の方は期待出来ない。

「ええまあ、ぼちぼちです」

アヤカは笑顔で応対した。クノキはまだ食事中。ファルナは無視を決め込む事にした。

「せっかく美人揃いだっつのに、男っ気がないのは寂しいじゃないか。一緒に飲まないか
ん？」

「ごめんなさい。未成年もいるし、あたし達、お酒は飲まないのよ」

「おお。いいじゃねえか。酒に強い女は可愛げがなくていかん」

余計なお世話だと思いつつ、アヤカは手を刺激しないように対応する。

「その紅い髪のお嬢さん。綺麗な髪だね。染めてんの？」

別の若い男がクノキに向かって言った。

「いえ、元々です」

淡々とした口調でクノキは答えた。視線は料理に落としたままだが。

「マジかよ!? こんな綺麗な紅い髪なんて見た事ないぜ」

若い男が無遠慮にもクノキの髪に触れようとした時——男の視界がぐるっと回った。

「? ? ?」

気付けば若い男はアヤカに投げられていた。怪我をさせないようにゆっくりと床に落とされたため、彼は何が起こったのか判らなかつただろう。

場が一瞬で沈黙する。

「あら、ごめんなさい。手がすべりました」

アヤカは悪びれもせず、何事もなかったように席に戻った。

後ろのテーブル席の男達は、投げられた仲間を見てげらげらと笑った。

「こ、このっ!」

投げられた男が顔を真っ赤にして立ち上がり、アヤカに掴みかかる——が、次は腕をひねられ、再び床に押し付けられた。

またもテーブル席の男達が爆笑する。

「いい加減にしてくれませんか? ウェイトレスさんが注文したパフェを持ってこられなくて困ってるでしょう?」

そう言い、アヤカはひねった腕に力を込める。

「——い、痛い!」

腕をひねられた男が悶絶するのを見て、アヤカ達に声をかけてきた別の男二人が慌てた。

「ど、どうする?」

最初に声をかけてきた男がもうひとりの男に言った。

「どうって……女相手にコケにされてまるかよ!」

三人目の男が懐ふところに手を入れた。服の膨らみから見て銃だと判断したファルナは男より速く自分の銃を抜いた。オートマチック式拳銃〈ガバメント〉の銃口を男の眉間に向けて一瞬で照準。

「——動くな。後ろの連中もだ」

セーフティ チャンバー
安全装置を解除。薬室に弾は装填済み。激鉄もすでに起きている。あとは引き金を引くだけで男の息の根を止められる。

再び場に沈黙が降りる。

「言っておくが、これは正当防衛だ。先に得物に手を付けたのはあんた達だからな」
ファルナは面倒くさそうに続ける。

「知っているか？ 撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ。あんた達にはあるのか？ 撃つ覚悟と、撃たれる覚悟が」

誰一人ファルナに意見する者はいない。

「ないなら帰んな。銃の弾だつて安くないんだ」

言つて後ろのテーブル席の男達にも睨みを利かせる。ハッターだと言う者はいなかった。「だそうですよ。気をつけて帰ってくださいね」

関節を極めていた腕を離し、アヤカは床に押し付けていた男を解放する。

最初に声をかけてきた男達三人が逃げ出すと、テーブル席にいた残りの四人も、ファルナの殺気にあてられてすごすこと退散して行つた。

「――馬鹿共が」

「いや助かったわ。まさか、こんな事で銃まで抜こうとするとは思わなかったわね」

「よく言う。あんたの懐ふところの〈ジェリコ〉は飾りじゃないでしょう？」

〈ジェリコ〉――アヤカの愛用しているオートマチック式拳銃だ。ファルナと違い、彼女はめつたに抜く事はないが。

「使わないで済むなら、それに越した事ないでしょう？」

「使うべき時には使いなさい。護まもれるものも護れないわよ」

「おっしゃる通り」

ファルナの言葉に、アヤカは苦笑で応じた。

そこへ注文したパフェをウェイトレスが運んできた。

「ごめんなさいね、騒さわがしくして」

アヤカが愛想笑いを浮かべる。

「い、いえ。お二人とも格好良かったです！」

ウェイトレスの女性が緊張した面持ちでそう言つた。

「どう？ ありがとう？」

「ふん」

アヤカは笑顔で応え、ファルナは嘆息。クノキだけは我関せずとパフェに手を付けていた。



やや狭い会議室。そこには五人の男の姿があった。

三人は〈バニッシュラプター〉の開発に関わる技術者達の中心的人物。一人は政治家。もう一人は軍人だった。

「〈バニッシュラプター・プロジェクト〉の状況はどうかね？」

軍人の男が言った。

「機体は完成しています。現在、稼働テスト中です」

技術者の男が答えた。

「テスト状況は芳しくないそうだね」

「は、はい……。ですが近日中にはデータを取って――」

「それでは遅いのだよ」

技術者の言葉を軍人が遮った。

「カタログスペックを見せてもらったが、武装の運用性が相当高いようだね」

「それは設計段階から、あらゆる武装に対応せよとの命令で……」

「しかし、これでは万一、敵の手に渡った場合、脅威となるな」

政治家の男も言った。その表情に意味ありげな笑みを浮かべて。

「何より、コストパフォーマンスが悪すぎる。こんなものを量産出来ると思っているのかね？」

別の技術者が答える。

「もちろん、量産化の際にはそれに適したデチューンと簡略化を図ります。コストも七割以下に抑えます」

軍人と政治家。この二人が〈バニッシュラプター・プロジェクト〉を押し進めた者達の代表であり、最高意思決定権を持っている人物だった。

本土決戦における元ガイロス帝国軍元帥プロイツェンの反乱と、それに伴う首都ヴァルハラの大壊滅より甚大な被害を受けたガイロス帝国軍の中には、我が身可愛さにネオゼネバス帝国に下る部隊や基地がいくつかあった。中にはガイロス帝国に身を置いたまま、ネオゼネバス帝国に通じる者達もいた。彼等が、同じようにネオゼネバス帝国に取り入ろうとする政治家と結託し、最悪のケースが発生した。

ガイロス帝国上層部にまで食いこんでいた彼等は〈バニッシュラプター・プロジェクト〉に目を付けた。新型のゾイドという手土産を持って、ネオゼネバス帝国に亡命する――ガイロス帝国に見切りを付けた彼等はそう考えたのだ。

軍人が言う。

「それでも時間がかかりすぎている。〈バニッシュラプター〉の最終調整はネオゼネバスでやってもらおうか」

技術者の三人が慌てふためく。彼等は軍人と政治家が、ネオゼネバス帝国と通じているのを知っている。知った上で〈バニッシュラプター・プロジェクト〉に参加していた。〈バニッシュラプター〉の設計図を見て、ヒトとしての良心より、技術者としての好奇心が勝ったからだ。

政治家が言う。

「最近、私達の周りを嗅ぎ回っている連中もいてね。彼の言うとおり時間がなくなった」
技術者の三人目が言う。

「そんな、未完成な状態で……？」

「戦争はまだ続く、ネオゼネバスに渡ってからでもいいだろう」と軍人。

「二日後にこの基地はネオゼネバスの襲撃を受ける。そこで我々は彼等に投降する——〈バニッシュラプター〉と共にね。そういう筋書きなのだよ」と政治家。

技術者達はただ無言。自分達はとんでもない事に加担してしまったのではないかと、今更ながら気付いたように。



酒場での出来事から二日後。

ファルナはアヤカとクノキを連れて、〈バニッシュラプター〉の格納庫にいた。

〈バニッシュラプター〉のテスト状況は良好とは言い難かった。そこで、アヤカの提案した『対話による意思の疎通』を図る事となった。

「この子が〈バニッシュラプター〉？ いい感じじゃない」

黒いポニーテールの娘——アヤカが〈バニッシュラプター〉の巨体を見上げて言った。

「洗練された造形美を感じるわ。さすがはロゼットの設計したゾイドね」

「見てくれだけじゃない。スペック通りなら、こいつはとんでもない化物よ」

ファルナは言いながら〈バニッシュラプター〉の脚部の装甲を乱暴に叩いた。

びくつと脅える様に〈バニッシュラプター〉が身を縮めた。

「なるほどね。これは臆病だ」

アヤカは苦笑して叩かれた所をなでてやる。

そして、すっと目を閉じた。

「……どっつ？」

ファルナが訊ねる。

「そうね。とてもいい子よ。これはやっぱり、当人同士で話し合った方がいいかも」

と、アヤカは朗らかに言った。

——〈感応者〉。

ゾイドと心を通わせ、交感する能力を持つ者を俗に〈感応者〉と呼ぶ。アヤカがそうだ。

ゾイドの機体に触れる事で、そのゾイドが何を思っているか知る事が出来る。この能力が高い者は、より具体的な『言語』として受け取り、ゾイドと『会話』をする事も可能だという。

「という訳で——お願いね、クノキ」

「了解です、マスター」

紅い髪の少女——クノキはアヤカをマスターと呼ぶ。この二人がどういう関係なのかをファルナは深くは知らないが、ただならぬ関係である事は想像出来た。まさか文字通り主従関係ではないだろうか……。

「どうしたの、ファルナ？」

アヤカが声をかけてくる。

「いや、何でもない」

そう言い、ファルナは〈バニッシュラプター〉のコクピットに座った。キャノピーは開放したままだ。

やがてクノキが、ファルナが通ってきたのと同じキャットウォークを歩いてきた。コクピットの脇に立ち、白く細い腕でその装甲に触れる。

「準備はいいですか？ ファルナ・イカルガ」

「ああ、よろしく頼む」

そしてコクピットの装甲に触れているクノキの身体がぼんやりと紅い輝きを放ち始めた。ゾイドの記憶装置には『空き領域』と呼ばれるデータの余剰スペースがある。そこに形成されるのが『仮想空間』だ。仮想空間ではゾイドがヒトの姿を採り、直接、搭乗者とコミュニケーションを取る事が可能となる。

これからファルナが行おうとしているのは、〈異能者〉であるクノキの仲介で、自分の意識を仮想空間に送り込むというものだ。

〈バニッシュラプター〉との対話のために。

仮想空間での対話には条件がある。

ヒトの呼びかけに、ゾイドが応える事——それが最低条件だ。ゾイドが拒めば、仮想空間に行く事すら出来ない。そして、現状のファルナと〈バニッシュラプター〉の関係では、

対話は不可能だろう。故にクノキの仲介が要る。

ファルナの座るコクピットが、クノキの放つ紅い光に包まれていく。不思議と温かい気持ちになるとファルナは感じた。

「(バニッシュラプター)が応えてくれました。今なら対話が可能です」

やはり淡々とした口調でクノキが言った。

「ありがとう。コクピットを閉じるから、少し下がって」

「……ファルナ・イカルガ」

クノキにしては珍しく、少しだけ躊躇うような素振りでも口を開いた。

「何？」

「『彼女』はとても繊細です。出来るだけ、優しく接してあげてください」

「……判った。努力はするわ」

ファルナが答えると、クノキは相変わらず何を考えているか判らない無表情のまま、コクピットから離れた。

それを確認し、ファルナは(バニッシュラプター)のコクピットを閉じる。初めて体験するゾイドとの感応現象に一抹の不安を感じつつ、彼女の意識は仮想空間へと飛んだ。



襲撃は正午を告げる時報と同時だった。ガイロス帝国軍ゾイド開発局・第二研究所のリーダーが捉えたのは、ネオゼネバス帝国軍だった。(ガンタイガー)が十体、(ダークスパイナー)が五体、そして(バーサークフューラー)が一体。

どれも(アイゼン・ドラグーン)の中核を担う戦闘ゾイドである。

それが計十六体。敵としてはかなりの脅威だ。

「いやはや。まいったわね、これは」

アヤカは愛機のコクピットで呟いた。

彼女が搭乗するのは重武装のオオカミ型の中型ゾイド——その名は(ヤミヒメ)。

全身に武器を満載した射撃・砲撃戦用装備であり、正式な名称は(ヤミヒメ 火力制圧用装備)。アヤカが最も好んで運用する装備だ。

研究所の防衛戦力は実質、(ヤミヒメ)だけだった。戦闘ゾイドも何体か配備されているが、敵に(ダークスパイナー)がいるため、出撃が不可能なのだ。ゾイドのコントロールを奪うジャミング・ウェーブの有効範囲外からの遠距離攻撃が出来ないのであれば、みすみす敵の手に堕ちるだけ。であれば、出撃しない方がいい。

「は、はい……バニッシュラプターです。長いので『バニラ』とお呼びください。バニラ
主人様」

〈バニッシュラプター〉の化身の少女は、たどたどしい口調でそう言った。
「私が何をしに来たのか、判るわね？」

ファルナは〈バニッシュラプター〉の化身の少女——バニラに訊ねた。

「……………はい。わ、わたしが役立たずだから、叱りに来てくださっただけですよ」

バニラは恐る恐るといった口調で答えた。

「そうだ。お前はゾイドだ。戦闘兵器だ。戦うためにその存在がある。なのに、何を恐れる？ なぜ、恐れる？」

そう——それは理だ。

どんなに不条理と言おうが、覆せない真理だ。

「嫌なんです……戦うのは、怖いんです」

バニラは俯く。

「ゾイドだからって、戦闘機械だからって、どうして戦わなければいけないんですか……
!？」

「それがこの世界の理だ。お前には力がある」

「わ、わたしが求めた訳ではありません……」

嘆息し、ファルナがバニラに歩み寄る。

もう手が届く距離まで近づく。

バニラは目を閉じた。次に来るであろう暴力か罵声に脅えながら。

しかし——

「……………え？」

バニラを襲ったのは、そのどちらでもなかった。

目を開くと、ファルナの顔が間近にあった。彼女は片膝を地面に突き、バニラの小柄な
身体を優しく抱きしめていた。

「ご、ご主人様？」

ファルナの意図が読めず、バニラはただ困惑した。

「確かに不条理よね。誰もが思うようには生きられない。お前みたいなゾイドがいる事も
理不尽だ」

「……………」

「だが、悲観していても何も変わらない。今の自分を否定しても、いい事なんか何もない」

「……………」

「現実を受け入れて、理不尽には抗いながら、少しずついい、前に進みなさい」
ファルナはそこで言葉を切った。



ファルナの抱擁に、厳しくも優しい言葉に、〈バニッシュラプター〉の化身の少女——
バニラは戸惑った。ファルナは怖いヒトだと思っていたから。叱責されると覚悟していたから。

「……でも、やっぱり、怖いです」

バニラは再び俯いた。海碧色の長い前髪で表情が隠れる。

ファルナは再び嘆息し、

「大丈夫だ。お前は強い。そして、お前には私がいる。私の言う通りにすれば、何も怖くない」

優しい声音だ。これがファルナという人物の本質なのだとバニラは理解した。
だから、顔を上げて問う。ありったけの勇気を振り絞って。

「……わたしに出来るでしょうか？ わたしでも戦えるでしょうか？」

「言ったぞ、お前は強い。出来ない事なんてない」

「……信じて、いいんですか？」

「当然だ」

「……わたしで、いいんですか？」

「お前だから言っている。一緒に戦ってくれるか？」

ファルナが問うてくる。

戦うのは怖い。だが、自分に優しくしてくれたヒトに——ファルナの期待に応えられないのは、もっと怖い。

だから——

「……はい！ ご主人様！」

「どうでもいいが、『ご主人様』はやめてくれないか」

「では、何とお呼びしたらよろしいですか？」

「ファルナでいい」

そう言つてファルナはバニラの髪を少し乱暴になでた。目線が合わないように立ち上がり、少しだけ顔をそらして。

もしかしたら照れているのかもしれない。

テストの時は怖かったファルナが、少しでも可愛らしく思えた。普段は怖いけど、本当はすごく優しいヒト。

それが嬉しくて、このヒトとなら戦える気がした。

臆病な自分を変えてくれる。駄目な自分を叱ってくれる。弱い自分を護ってくれる。

このヒトとなら――

「よろしくお願ひします、ご主人様――ううん、ファルナ！」

と、メイド服の少女は泣きそうな笑みを浮かべて、ファルナの名を呼んだ。



〈ヤミヒメ〉の放った多弾頭ミサイルによる爆撃と、二連装砲塔キャノンによる狙撃により、敵〈ガンタイガー〉部隊は、その数を半分にまで減らしていた。

「先制攻撃で五体か。もう少し減らしたかったけど――ま、よしとしましょう」

〈ヤミヒメ〉のコクピットでアヤカが呟く。敵は高速戦闘用のトラ型の小型ゾイドで、とにかくすばしっこい。初手で五体墜おとせれば上等だ。

「ミサイル・ランチャー、強制排除ペー。キャノンをフルオートに設定。撃ちまくるわよ！」
「了解です、マスター」

アヤカの呼びかけに、サブ・シートに座るクノキが淡々と応じる。両者のテンションの差は明らかだ。

アヤカは両手の操縦桿トリガーの引き金を引きつ放しにする。次々と〈ヤミヒメ〉の背部にあるガトリング砲と二連装砲塔キャノンから弾丸が撃ち出されていく。

「ガンホー！ ガンホー！ ガンホー！」

彼女の悪癖の一つ乱射トリガー・ハッピー中毒。

こうなったらもう、彼女は止まらない。弾を全弾撃ち尽くすか、敵機を一掃するまで引き金を引き続けるだけだ。

「……………」

クノキは嘆息。今更、何を言っても無駄な事は彼女がよく知っている。

だが、派手に弾幕を張っているだけの効果はあり、敵機の侵攻が停止した。〈バーサークフューラー〉以外は長距離用の武装がない。とにかく距離があるうちに数を減らす。ガトリング砲による火線と、250ミリ弾による砲撃が次々と敵をハチの巣に変えていく。

アウト・レンジからの狙い撃ちが〈ヤミヒメ〉火力制圧装備の基本戦術だ。アヤカの表情に焦りはない。単純に『撃つ』という行為を楽しんでいる。

「マスター、残弾に注意を」

「大丈夫よ。それに、そろそろ頃合いでしょ」

クノキの忠告にアヤカは澄まし顔で応える。

戦況に変化が起きたのは次の瞬間だった。前に出ようとするスピノサウルス型の中型ゾイド（ダークスパイナー）の一体が突然、右後脚を撃ち抜かれて転倒した。さらに立て続けに別の二体の（ダークスパイナー）もその場に攔座した。どの機体もコンバット・システムを正確に撃ち抜かれている——高精度のピンポイント射撃だ。

「ようやくお出ましね、（バニッシュラプター）」



AZ75ミリ大型電磁狙撃銃（サンダー・ボルト）。

それは特殊弾頭を電磁加速して撃ち出す大型の狙撃銃である。射程と貫通力に特化しているためピンポイントで急所を狙わない限り有効打にはなりにくい。有効射程で約十五キロメートル、最大射程では五十キロメートルにも及ぶ狙撃を可能とする。

だが——

「狙いが甘い。この距離なら直撃させられるはずだ」

（バニッシュラプター）の cockpit でファルナは愛機に檄を飛ばす。

敵機との距離は五キロメートルと離れていない。にもかかわらず三機の（ダークスパイナー）を撃破するのにそれぞれ二発——計六発の弾丸を消費した。一撃目で動きを止め、二撃目でとどめを刺す形だ。それがファルナは気に入らない。本来であれば一撃でコンバット・システムを射抜く事が可能なのだ。

「びびってるから狙いがされる。しっかり狙いなさい」

（バニッシュラプター）が項垂れる。

ファルナは一つ溜息を吐いて、言う。

「私を信じると言ったはずよ。怖がる必要はない」

（バニッシュラプター）が迷うような挙動を見せる。

すかさずファルナは駄目押しの一言を発する。

「——お前を信じる私を信じなさい。私達なら、出来ない事なんてないわ」

すると（バニッシュラプター）の機体が震えを止めた。不安定なブレがなくなり、ゾイドコアの出力も少しずつ安定していくのをファルナは感じた。

「それでいい」

口の端に笑みを浮かべ、ファルナは〈サンダー・ボルト〉を切り離した。
このまま狙撃で勝負をつけてもよかったが、ファルナは〈バニッシュラプター〉の『本気』を見たくなくなった。

「行くぞ——〈バニッシュラプター〉」

——グウウウ………グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

ほんの少しの逡巡。しかし、意を決したようにダークグレーとコバルトブルーに塗られたユタラプトル型ゾイドが吠える。機体各部に備えたサプレッサー・スラスターを噴かせ、ホバー走行に移行し、敵機目がけて駆けだした。

その姿に迷いはない。恐れも、痛みも、悲しみも——何もかも振り切ったかのようだった。



「やっぱり良い子じゃない——〈バニッシュラプター〉」

残った二体の〈ダークスパイナー〉を撃墜したのを確認しつつ、アヤカは戦場に飛び込んで行く。〈バニッシュラプター〉に通信を送る。

「ダークスパイナー鬱陶しいのは全部墜おとしたから、後は任せていい、ファルナ？」

『ああ。美味しいところは私達でもらうぞ？』

「りょーかい、了解」

〈バニッシュラプター〉のファルナから応答を聞き、アヤカは気楽な調子で答えた。

〈ダークスパイナー〉の放つジャミング・ウェーブはゾイドの操縦システムを狂わせる。
故に接近はせず、ジャミング・ウェーブの有効圏外からの攻撃というのがお決まりだ。

残る〈ガンタイガー〉は三体。まだ バーサークフェーラー大物が残っているが、ファルナの操縦技術は一ランク上の機体でもやり合える事をアヤカは知っている。

だから——

「それじゃあ、後はよろしく！」

『任せなさい』

〈ヤミヒメ〉と〈バニッシュラプター〉がハイタッチでもしそうな距離ですれ違ふ。ここからは〈バニッシュラプター〉の舞ステージ台だ。

◆ ◆ ◆
ネオゼネバス帝国軍の襲撃部隊。三機にまで減った〈ガンタイガー〉のパイロット達は事態に困惑していた。

内通者からの情報が正しければ、研究所の防衛戦力は実質、コマンドウルフ・タイプ一体のはずだった。

それが思いのほか厄介だった事もあるが、鹵獲予定だった〈バニッシュラプター〉が敵として現れた。

更にそれが、宵闇色の〈コマンドウルフ〉と入れ替わるように、唐突にレーダーから消えたのだ。光学、赤外線、音紋などのあらゆるセンサーにも障害が発生している。

『こちらでは捕捉出来ない。センサーが全部いかれてやがる!』

『こつちも駄目だ! 何も見えない!』

僚機からの通信が余計に混乱に拍車を掛ける。

「どうなってるんだ!」

〈ガンタイガー〉のパイロットは悲鳴を上げるしかなかった。



AZ40ミリ拳銃〈ハンティング・ホーク〉を左右交互に撃ち放ち、二機の〈ガンタイガー〉を一瞬で撃破する。小型で取り回しのいい対ゾイド用拳銃は近距離戦で圧倒的な効果を発揮する。

「これは使えるな——」

ファルナは〈ハンティング・ホーク〉の威力に満足し、最後の〈ガンタイガー〉に照準を付ける合間に追加のミサイルを撃ち上げる。

AZジャミング・ミサイルは、半径二百五十メートルの範囲のあらゆるセンサーの更新速度をランダムで阻害する粒子を散布する。これと併せて、脚部に装備されたステルス・ウイング・ユニットを展開する事で〈バニッシュラプター〉はその名の通り敵機の前から消えるのだ。

完璧なステルス機——〈バニッシュラプター〉は、まさにその名に相応しい究極の機体だった。

二発目のジャミング・ミサイルからジャミング粒子が散布される。敵機はこちらの位置を完全に見失っており、ただうろたえている。

「——悪いが、圧倒させてもらおう」

言うが早いか最後の〈ガンタイガー〉に目標を定め、〈バニッシュラプター〉の尾——テール・ブレードでコンバット・システムを切り裂く。こちらでも使い勝手は良好だ。

残り敵機数——

〈バーサークフューラー〉と云えど、『目』が見えなければ敵ではない。〈バニッシュラプター〉より大柄なテイラノサウルス型の機体が、苦し紛れにバスター・クロウを振り回すが、そんなものが当たるはずもない。

「これでラストだ。ストライク——」

ファルナの宣言と共に〈バニッシュラプター〉が〈バーサークフューラー〉に跳びつき、右脚を振り下ろす。

ストライク・レーザー・クロウⅡ。

〈ライガーゼロ〉などに装備されているものを強化したもので、破壊力よりも切断力に重点が置かれており、使用時には黄金の輝きを足の爪にまとって敵機を切り裂く。

「レーザー・クロオオ——ッ！」

金色の軌跡が最後の敵機に刻まれた。



「素晴らしいじゃないか……これが〈バニッシュラプター〉の力かね!？」

「これだけの性能を持っているのなら、多少のコストなどどうとでもなる!」

〈バニッシュラプター〉の戦闘をモニターしていた男達は興奮していた。〈バニッシュラプター・プロジェクト〉の最高意思決定権を持つ軍人と政治家の男だ。

ネオゼネバス帝国に亡命する事は叶わなくなったが、それならばこのまま何食わぬ顔をしてガイロス帝国軍に売り込めばいい。そのため地位と地盤は確保している。なんならヘリック共和国が相手でもいい。そう考えた。

男達は〈バニッシュラプター〉の戦いに酔っていた。それがまるで自分の力だと錯覚するほどに。それだけ〈バニッシュラプター〉の戦闘能力は圧倒的だったのだ。

「……………」

しかし、同席している技術者達の表情は微妙だった。

不審に思った軍人の男が訊ねた。

「どうしたのかね? 〈バニッシュラプター〉の正式量産化はもはや確定だ!」

「ははっ。我々は勝てるぞ!？」

軍人と政治家、彼等の状況判断能力はすでに失われていた。

そこへ――

「――良い感じにイッちゃつてるとこ悪いけど、そういう訳にはいかないのよね」

突然、会議室の扉を開いて現れたのは黒髪黒瞳の若い娘だった。

「誰だ!？」と政治家の男が言った。

「アヤカ・T・シユバイツァー、名乗るほどの者じゃないわ――あれ？ 名乗っちゃった？」

まあいいわ、と呟き、彼女はポニーテールを揺らしながら、男達に近づいた。

アヤカと名乗った娘が愛用のオートマチック式拳銃(ジエリコ)を構えて不敵に笑った。

「生憎^{あいにく}だけど、あなた達がネオゼネバス帝国と通じていたのは確認済みよ」

「な――なぜ、我々の事が判った!？」

両手を挙げながら軍人が言った。

「フリーの『なんでも屋』をなめるな、とだけ言っておくわ」

そう言つてアヤカは黙り込んだ技術者達を見て、意味ありげな視線を送った。

「まさか、貴様等が!？」

政治家の男は気付いたようだ。技術者達が(バニッシュラプター)に関する情報をアヤカに密告したのだと。

「最高の兵器を自分達で造り上げた……一瞬でもいい夢が見られたでしょう？ まだ言いたい事があれば法廷所でどうぞ」



戦闘を終え、(バニッシュラプター)を降りたファルナは、アヤカから事のあらましを

聞かされた。

ファルナはアヤカに訊ねた。

「……(バニッシュラプター)はこれからどうなる？」

「そうね、本当ならしかるべき機関に送られて技術解析の後に解体処分――つてところなんだけど、ちよつと面倒くさい事になつてるのよね」

アヤカは少し顔をしかめて応えた。

「どういう事だ?？」

それがね、と前置きしてアヤカは状況を説明した。

彼女曰く、事件の主犯格である軍人と政治家の二人を調べた結果、芋蔓^{いもむす}式に、大量の共犯者が捜査線上に浮かび上がり、それをすべて摘発した場合、ガイロス帝国自体が立ち

行かない状況になるらしい。本土決戦での被害は、それだけガイロス帝国という国に甚大な病巣を植え付けていたのだ。

〈バニッシュラプター・プロジェクト〉を公に事件として取り沙汰せば、多くの人間が路頭に迷う。故にそれは不可能という事だ。

「これが戦争に敗れるという事か……」

ファルナは軍人ではない。ガイロス帝国の民ですらない。しがない傭兵に出来る事など限られている。事件を事件として扱えない。犯罪者にその罪を問う事すら出来ない。

だったらせめて、心を通わせた戦友だけでも救いたい。

「——だったら、〈バニッシュラプター〉は私が好きにしているいな？」

ファルナの発言に「ん？」とわざとらしくアヤカが首を傾げた。

「〈バニッシュラプター・プロジェクト〉などなかった。なら〈バニッシュラプター〉なんてゾイドも存在しないはずだ」

ふふっ、とアヤカは笑って、

「そうね。〈バニッシュラプター〉は設計だけに終わった幻の名機——つて事でいいんじゃない？」

と、楽しげに言った。

「それに〈バニッシュラプター〉もあなたを気に入ったみたいだし、もうこの子は他の誰にも乗りこなせないと思うのよね。なんて言うのかしら——」

「——相思相愛、ですか」

いつからそこにいたのか、紅い髪と瞳の少女——クノキが言った。相変わらず無表情で淡々としているため、何を考えているのかまるで読めない。

アヤカは「そう、それぞれ」と楽しげに言う。

クノキは続ける。

「〈バニッシュラプター〉は貴女を望んでいます。貴女は『彼女』に希望を与えた。だから貴女には『彼女』を受け入れる責任があります」

淡々と、事実だけを言う。

「……………」

ファルナは〈バニッシュラプター〉の機体を見上げた。ゾイドはただの兵器ではない。心があるのだ。それは彼女もよく知っている。

「〈バニッシュラプター〉——」

名前を呼んだ。戦うのが怖い臆病な——しかし、恐怖に立ち向かえる強いゾイドの名前を。

「バニッシュラプター」が窺^{うかが}うようにファルナに視線を向けた。

——私と来るか？

いや違う。臆病な『彼女』にはこう言うべきだ。

「私と一緒に来い」

誰もが自分で自分の道を決められる訳ではない。時には手を差し伸べ、道を示す事も必要だ。

それが救いになる時もある。

そうであればいいと思う。

だから——

「お前は今日から私のゾイドだ」

『——はい、ファルナ！』

ファルナには「バニッシュラプター」の化身の少女が、そう答えたように聞こえた。

エピローグ

数日後、ファルナは〈バニッシュラプター〉を引き連れてL・C・ファクトリーを訪れていた。

そこで彼女等を待っていたのは長い金髪と澄んだ碧眼へきがんを備えた、美しく、気品のある女性だった。

ロゼット・コダール。

年齢は二十七歳。ファルナとは幼馴染おさなじみであり、とある技術者の称号である『Kamishiro』の名を襲名した凄腕のメカニックでもある。彼女の名を冠した、このファクトリーでは『主任』と呼ばれている。

ロゼットは〈バニッシュラプター〉を間近に見るなり狂喜乱舞した。

無理もない。自分が設計したにもかかわらず、開発には携たずさわれなかった〈バニッシュラプター〉は、ロゼットにとって里子に出した子供のようなものだ。

「初めまして——〈バニッシュラプター〉」

そう言うと、ロゼットは〈バニッシュラプター〉の機体を優しくなでた。

「大変だったね。辛かったよね。でも、もう大丈夫だから」

〈バニッシュラプター・プロジェクト〉の顛末てんまつはアヤカから報告を受けている。だからこそ、こうして出逢であえた事がロゼットにとっては奇跡にも思えた。

フリーの『なんでも屋』であるアヤカには、ガイロス帝国の醜聞スキャンダルを口外しない事。ファルナには、引き続きガイロス帝国の傭兵として契約を続けてもらう事。

この二つを条件に、〈バニッシュラプター〉は『登録抹消』という形で手放された。

そうした結果、ファルナは〈バニッシュラプター〉の正式な搭乗者となり、こうして帰るべき場所へと帰ってこられた。

「ありがとう、ファルナ。この子を救ってくれて」

コクピットから降りてきたファルナに、ロゼットは礼を言った。

「大した事はしてないわ。決めたのは〈バニッシュラプター〉。私は少し……いえ、強引に手を引いただけ」

「それでも、ファルナじゃなかったら、この子は心を開かなかったと思う」

ロゼットがまだ幼い頃、引っ込み思案だった彼女の手を強引に引いて外に連れ出してくれたのもファルナだった。

だからロゼットは知っている。手を引いてくれる誰かの大切さを。

「ファルナは優しいね」

「……ふん」

ロゼットの言葉に、ファルナは少しだけ居心地悪そうにそっぽを向いた。そんな幼馴染の態度が微笑ましくて、ロゼットは優しい笑みを浮かべた。

こうして、また一つの真実が時代の闇に消えた。

世界とは清濁併せ持つものだ。正しさだけでは救えないものもある。

ならばせめて、自分の理^{こゝろ}で生きろべきだ。

少なくともファルナと（バニッシュユラプター）——『二人』の出逢^{であ}い、それは運命であり、宿命であり、必然だった。

FIN

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『とある猛禽竜の純心 - バニツシユラプター誕生篇 - 』をお届け致します。

この作品は作品集である『KAMISHIRO Works』を挟んで、同人誌としては第二弾となります。紙白さんの製作された改造ゾイドとしては三作品目で、本来であれば『レイジウルフ』の次に同人誌化されるべきなのですが、書いたのは『レイジウルフ』の次だったりと、ちよつとややこしい背景があります。詳細は更新日——九月十四日のブログに書いていますので、興味のある方はそちらを参照してください。

さて、ちよつとだけ内容についても触れます。(バニツシユラプター)の仮想人格『バナラちゃん』ですが、この名前はオフ会などで通称となっている愛称です。ロリでメイド服と、多分に僕の趣味が全開ですが、当時は冒険でした。また、今ほどひどくなかったので。ちよつと『ロリっぽいロリ』が書きたかった時期で、ステルス機なら恥ずかしがり屋に違いないという妄想の結果です。

ちなみに、ツインテールは紙白さんのオーダーです(さりげなく巻き込みます)。イメージジCVは川澄綾子さんです。これも紙白さんの設定です——僕は悪くない(笑)。

そんな訳で、そろそろ謝辞を。

最初は当然、今回の企画にも協力してくださっている紙白さんに感謝を。ありがとうございます。ございます。バナラちゃんは萌えキャラですし、(バニツシユラプター)は燃えます。ファルナさんは男前で、ロゼットは癒しですね。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次回は『レイジウルフ篇』です。一週間後にまたお会いしましょう。

2014 / 09 / 11 流遠亜沙

感想を書く

『5th anniversary of KAMISHIRO』ページに戻る

あとがき